



根堀台だより

平成30年1月15日

第 89号

校訓「進歩(文)」「健康(武)」「協力(道)」



冬休みも終わり、今日から学校が始まりました。大きな事故や病気もなく、全員無事に新たなスタートをきることができたことを大変嬉しく思います。休み中でも部活動や課題の点検などでほとんどの生徒が登校してきていましたが、果たして有意義な時間を過ごすことができたかどうかは「休み明けテスト」で問われることとなります。2018年の良いスタートとなることを願っています。

今年の干支は「戌年」です。しかし、「戌」という漢字は、実は動物の犬を意味している漢字ではなく、「収穫した穀物を纏(おさ)める」という意味に使われており、もともとは収穫期である「9月」を表す漢字でした。特に今年は、戌戌(つちのえのいぬ)の戌年となることから、植物の成長で例えると「絶頂期にある」という意味になります。昨年までの努力や成長、豊かさが今年さらに増加して「絶好調」となると考えれば大変縁起がよいので、3年生は進学、1・2年生は進級を迎える今年を、さらなる成長の年、成長の絶頂期の年にするためには、常に前向きに努力を続けることが大切だと言えます。

また、「戌年」は十二支を広めるために、9月を指す難しい漢字の「戌」に親しみのある動物である「犬」を当てはめたのが始まりです。本来は「犬」と「戌」にはなんの関係もないのですが、「犬」は社会性があり忠実な動物であることから、戌年生まれの人には勤勉で努力家というイメージがあるようです。是非ともそのイメージを大切にして、コツコツと「地道な努力」を重ねることを心がけていきたいものです。これが今年成長する上での、キーワードになるのではないのでしょうか。



明るい笑顔のサンコンさん

さて、今日の「休み明け集会」では、オスマンサンコンさんの生き方についてお話をしました。サンコンさんは同窓会の40周年事業の際、本校でご講演を頂いており、由利地域にとっても大変縁のある方です。サンコンさんには「外国人タレント」「外交官」という華やかなイメージがありますが、サンコンさんが歩んできた人生を振り返ってみると、あの優しくて人なつこい笑顔の下には、大きな困難を乗り越えてきた強さが秘められていました。夢に向かって羽ばたこうとする96名の子どもたちには、夢を叶えるための「努力の大切さ」に是非気付いて欲しいものです。保護者の皆様、地域の皆様、今年も「チーム由利中」をよろしくお願ひします。

休み明け集会でのお話

明けましておめでとうございます。

今日から年度最期の学校生活がスタートします。皆さん、お年玉は沢山貰いましたか？この写真を見て下さい。この真ん中の人のことを知っている人はいるでしょうか？オスマンサンコンさんは外国人タレントとして有名ですが、元ギニア大使館一等書記官で、日本にギニア大使館を作るために外交官として来日されました。今年、私はオスマンサンコンさんとお友達になるという大変大きな「お年玉」を頂きました。

実はテレビで映されることはないのですが、サンコンさんは右足に障害があります。高校生の時、大好きなサッカーの試合中にアキレス腱を断裂しました。しかし、当時のギニアの医療技術が未熟だったため、曲がった足のままギブスで固定されたことで、足首から先が内側に90度曲がったままになってしまいました。運動神経が抜群で、かけっこでも1番、サッカーでも1番だったサンコンさんはこの怪我でサッカー選手になって世界へ羽ばたくという夢を失い、「自分の人生は終わりだ」と絶望感に打ちひしがれました。足のことを笑われたり、足のことでいじめられたり、陰口をたたかれました。ひそひそ話をきくと、自分のことを馬鹿にしているのだと思い喧嘩にあげられる毎日でした。

そんなサンコンさんにおじいさんは言いました。「なあ、サンコンよ。若いのになあ、お前は不自由な体になっちゃった。昔、お前と同じように体が不自由で世間から白い目で見られた人がいたそう。でも、その人はお前と違って、それはそれは貧乏な家に生まれ、お前よりもっともっと苦勞して、もっともっと悲しい目に遭って、もっともっと辛い目にあって、でも必死に努力して、本当に努力して、このアフリカのために一生を捧げた外国人がいたんだよ。ギニアからはるか東の果ての、最果ての、日本という島国の、黄色い肌のその人の名は野口英世と言うんだよ。」サンコンさんの心には、野口英世という名前がしっかりと刻みこまれました。

そして、お母さんはそんなサンコンさんの曲がった足首を、毎日お湯の中に入れて、泣きながらマッサージしてくれました。ある日、空を飛んでいる飛行機を見て、サンコンさんは「どうしたら飛行機に乗れるの？」と聞きました。するとお母さんは、「一所懸命勉強することよ。そうすれば、足が不自由でも世界中どこへでも飛んで行けるのよ。」と教えてくれました。

サンコンさんは決意しました。「野口英世博士は不自由な手で医者になり、その手でアフリカの人たちのために生きた。僕はこの悪い足で世界中を歩こう。ギニアが豊かで、医療も進んだ国になれるよう外交官になろう。」と。それからサンコンさんは一生懸命勉強をしました。沢山本も読みました。サンコンさんは国費でフランスのソルボンヌ大学に留学します。フランス語・英語・スペイン語・イタリア語もマスターしました。そして、ギニアの国家公務員試験で全国1位となり外交官になりました。

サンコンさんはよく「明るく生きちゃいけませんか」という言葉を使います。どんなに辛い状況になっても、未来への希望を失わず、「なりたい自分」という「高い志」をもつことができれば、人は絶望から這い上がれるということをサンコンさんは学びました。そして夢があるから人は笑顔でいられるということも・・・。

ギニアの子どもたちは皆さんと違い、鉛筆1本貰っても大喜びするそうです。それは国が貧しいからです。サンコンさんは生まれ故郷のポッファ市に自分のお金で学校を建設しました。授業料もとらず、給食も無料で提供しています。そして学校に井戸を掘り、誰でも水をくめるようにしました。もう遠くの川まで水をくみに行かなくてもよくなったのです。そのためサンコン小学校の周りに、人が集まり町ができたそうです。そして今も新たな学校建設に取り組んでいるそうです。サンコンさんは言います。「最も大切なことはお金や物を与えることではない。ギニアに最も必要なことは教育だ。ギニアには世界有数の鉱山資源があるけれど、それを生かす技術や知識がない。僕は『知ること』が一番大切だと思う。子どもの頃の僕の空っぽな頭の中に、沢山の知恵や知識を詰め込んでくれた場所が学校だったからだ。」と。

ギニアの人はコップ1杯の水を全部飲むことはせず、少し残して土に還してあげる習慣があるそうです。例えば自分が遠くの川から何時間もかけて苦勞して運んできた大切な水でも、全部使うことをせず、感謝の気持ちを込めて残りを自然に還すのです。また、サンコンさんの家には貧しくてご飯も食べられない近所の人たちがいつもやってきました。そんなお腹が空いた人たちのためにお父さんは家族のご飯を分け与えていたそうです。最後にサンコンさんがお父さんから学んだ「一人前の人間として仲良く、幸せに暮らすためには大切な4つのこと」を皆さんに伝えます。

一つ目は「分かち合う」こと、二つ目は「ゆずり合う」こと、三つ目は「許す」こと、四つ目は、「感謝する」ことです。毎日の生活の中で嬉しいこともあれば、悲しいこともあります。喜びあったり、悲しみを「分け合える」仲間になりたいものです。そして、お互いに「ゆずり合う」思いやりの心を育てていければ、静いやトラブルが起こっても、大切な友だちだからこそ「許してあげたり」、自分が相手を傷つけた場合でも「許してもらえ」はずです。人間は決して自分一人の力で生きているわけではありません。自然の恵みや他の人の支えによって生きていることに「感謝」できる人になりたいものです。家族や、学校、仲間、地域の方々など、沢山の人たちに支えられ、励まされながら、3年生は進路の実現、1・2年生は進級を目指して、残された日々を大切に、夢に向かって進んで行きましょう。